

B—62 日本服飾にあらわれた色について
小袖を中心として

愛知淑徳短大 ○土田 正子
椋山女学園大家政 中保 淑子
椋山 藤子

1. 被服の色彩に関する研究は、種々の角度より行なわれている。わが国に古くから用いられている衣装にあらわれた色彩を調査分析することは、今日の服装色を解明する上に重要な意義があると考えられる。

そこで、古代より近世にいたるまでの染織物についてその配色状態を調べ、日本服飾にあらわれた色を追求する。

2. 今回は、室町、桃山、江戸時代における小袖をとりあげ試料とした。それらを改良マンセル色票と照合し、色の比較条件に基づき色度記号で記録した。そして、色彩の出現傾向を分析し、日本の伝統色との関連性を調べ、さらに配色状態について調和理論より検討した。

3. 室町、桃山、江戸時代の小袖に多くあらわれた色は、N 2 (すみ)、N 9 (しろ)、2.5 Y7/4 (くわぞめ)、7.5R4/8 (べにこうじ)、10YR7/2 (ときちゃ)である。すなわち、無彩色および、黄、黄赤、赤系統の出現がいちじるしい。

配色状態を分析すると、色相の関係は第2不調和、対比が目立ち、明度、彩度の関係は、いずれも調和帯が多く、各時代によりそれぞれ特長が認められた。